

伊勢湾台風当時、半田中学校で教師1年目だった橋本さんに、話を聴きました。

伊勢湾台風 当時の様子を語る

「台

風15号が来た日、9月26日
(土)の午前中は授業だった。

夜に台風が来るとラジオで言っていたので、図書委員の顧問だった私は、委員の子に『今日は委員会がないので、早く帰るんだよ。また月曜日会おうね』と声をかけた。今考えれば、それがその子と話した最後の言葉だった。」

少し間を置いた後、橋本さんは再び話します。

「台風翌日にラジオで半田の被害がすごいと聞いたので、家のある尾張横須賀から自転車で学校に向かった。学校では、学年主任に『自分のクラスの生徒の生死を確認してこい』と言われ、探しに行った。町は水で

浸かってしまっていたり、建物も倒壊していた。しばらく探すと、テントが張ってあり、遺体が並べられていた。1人1人顔を確認して回った。

市役所の2階ホールには、避難者がたくさんいた。住吉公民館にも遺体が並んでいて、身元の分かる人は事務室の前の名簿に記録されていたので、生年月日から生徒を探した。また、身元の分からない遺体が並んでいた。1人1人顔を確認した。そこに次々と遺体が運ばれてきた。

『何とか助かっていてほしい』と無我夢中で3日間探した。自分のクラスは全員無事だったが、半田中学校の生徒は19名亡くなった。」

「生徒からの話や作文からも『水



はしもと としかず
橋本 利和さん(81)

が出た』と誰かが叫んでから、あつという間に屋根まで水が来たようだ。逃げ遅れた人は亡くなってしまふ、津波のような高潮だった。当時、世の中は防災という時代じゃない。堤防ができたので、家の中にいれば大丈夫という意識で、高台に逃げるという考えはなかった。」

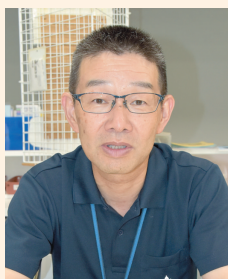
橋本さんは、真剣な表情で続けます。

「みなさんに伝えたいことは、防災についてしっかり準備をすること。いざというときの行動が分かっているれば、被害の拡大防止につながると思う。特に、台風は進路が分かるので、早期避難が大事。避難情報については、現在5段階の警戒レベルになったので、確認してほしい。」

今年は、伊勢湾台風から60年を迎えます。これまでを振り返ると、半田の街も、いろいろな対策がとられ、様変わりをしてきました。しかし、ハード整備だけでは、大切な命は救えません。

東日本大震災で亡くなられたある児童の親は、「災害対応マニュアル等はあったが、自分の事として考えられなかったため、その時がきても避難するスイッチが入らなかった」と語っています。伊勢湾台風の時も、被害が多大であったのは、被災前に海岸堤防の整備が完成していたことから、油断により避難が遅れたためでした。

今一度、過去の災害を教訓にして、「家庭での備え」を確認していただき、避難情報をキャッチしたり、異変を感じたら、すぐさま適切な行動をとっていただくようお願いいたします。



防災監
梶 信彦